

音楽配信がオープンに！？

酒井 寿紀 (さかい としのり) 酒井 IT ビジネス研究所

iPod が 1 億台を突破！

2007年4月に、アップルの携帯音楽プレーヤ iPod の販売台数が全世界で1億台を超えたという。iPod と一口に言っても、独立した二つの製品と一つのサービスからなる。

まず携帯音楽プレーヤ iPod がある。運動中とか、リラックスしたいときに聴きたい曲を登録しておけば、その場にふさわしい曲をいつでも聴くことができる。次に、iTunes Store という音楽配信サービスがある。日本ではサービス開始が遅れたが、2006年9月現在200万曲が、1曲150円か200円で配信されている。そして、iTunes という無料ソフトがある。これを使うことによって、音楽を iTunes Store で買ったり、CD から読み込んだりでき、また、それを iPod に書き込んだり、CD に焼き付けたりすることができる。

アップルはこれらの製品とサービスの組み合わせで、音楽の世界に革命をもたらした。この iPod はこれからどうなっていくのだろうか？

プロプライエタリか、オープンか？

現在は、通常はアップルが提供する上記の製品やサービスを組み合わせないと iPod は使えない。iPod は外界から閉じたアップル独自のプロプライエタリな世界である。

このプロプライエタリな世界は、新市場を開拓するには大変な威力を発揮した。しかし、音楽配信と音楽プレーヤを企業がプロプライエタリな世界に囲い込めばユーザーの不便を招く。現に、ソニー・グループは独自にプロプライエタリな世界を構築しており、ソニー・ミュージックエンタテインメントの曲は iTunes Store では購入できない。

現在、マイクロソフトなども音楽配信についてプロプライエタリな世界を構築している。このようなプロプライエタリな世界を実現して

いるのは、DRM (Digital Rights Management) という、著作権を保護するために特定の機器でしか音楽を再生できなくする仕組みである。アップルの場合は FairPlay という DRM を使っている。

この DRM について、アップルの CEO のスティーブ・ジョブズ氏が、2007年2月に自分の考えを表明した¹⁾。同氏は、「DRM を止め、どの音楽プレーヤでもすべての音楽配信を聴くことができるようにすることが消費者の利益になり、アップルはそうなることを心から望んでいる」と言う。アップルとしては、DRM を使い続け、現在の市場独占の状態を継続させる選択もあるはずだ。しかし、同氏は「アップルが DRM で音楽プレーヤの市場を独占しようとしているというのはまったくの誤解だ。われわれが追求しているのは、よりよい音楽の世界であって、カネではない」と言う。

そして、ジョブズ氏は「インターネットでの音楽の配信に当たり、レコード会社がアップルに違法コピーに対する保護を強く要請したので、解決策として DRM を採用した。しかし、現在最も普及している iPod に格納されている音楽で、iTunes Store から購入したものは3%に過ぎない。したがって、残りの97%は保護されてなく、どのプレーヤでも聴くことができるので、DRM にたいした意味はない」と言う。

また、同氏は「DRM のライセンスを競合他社に提供することによって、他社のプレーヤでもアップルの音楽配信を利用できるようにすることも考えられる。しかし、DRM をライセンスすると多くの人にその秘密を開示することになり、そうすればその秘密は必ず漏れる。ひとたび漏れれば、それはインターネットであつという間に広まり、DRM のカギを開けるソフトが無料でダウンロードできるようになる」と言う。

そして、ジョブズ氏は「DRMのない世界になれば、音楽配信会社や音楽プレーヤーのメーカーが新規にこの市場に参入し、優れた製品やサービスを提供しようとするので、結局レコード会社にとっても得策なのだ」と主張した。

EMI が爆弾発表！

このジョブズ氏の提言に応える形で、2007年4月に英国のレコード会社のEMIが衝撃的発表をした²⁾。従来、EMIがiTunes Storeで販売する曲には、アップルのFairPlayが適用されていた。しかし、同社は同年5月以降、音質と価格を上げ、そのかわりDRMをはずした曲をiTunes Storeを皮切りとして、他の音楽配信にも提供するという。もはや、iTunes StoreのEMIの曲を聴くのに、必ずしもiPodはいらなくなる。

このEMIの発表に同席したジョブズ氏は、本発表を歓迎して、「EMIが発表した、DRMなしの音楽の提供は、デジタル音楽革命の次の大きなステップだ。アップルはすべてのレコード会社に同様にすることを提案する。2007年末までには、iTunes Storeの曲の半分はDRMなしになるだろう」と述べた³⁾。

ジョブズ氏も、DRMを止めれば、iPodの売り上げが減るおそれがあることは十分承知しているはずだ。しかし同氏は、プロプライエタリな世界に永久に囲い込もうとしても不可能で、いずれはオープンにせざるを得ないだろうと考えているのだと思う。そして、目先の利益を追求することより、音楽の世界に革命をもたらすことに、より力を入れたいという考えのようだ。それは、一企業の経営者としての短期的な評価より、真の市場開拓者としての評価をより重視することでもある。

他のレコード会社と音楽配信会社の対応が注目される。

「OHM」2007年7月号

【後記】 2007年8月にユニバーサル・ミュージック・グループもDRMなしの音楽配信の試行を始めた。ただし、iTunes Storeはその対象からはずされた。ユニバーサルはアップルが強くなりすぎるのを警戒したのではないかとされている。そして同年12月、ワーナー・ミュージック・グループもアマゾンの音楽配信サービスでDRMなしに踏み切った。また、2008年1月にはソニーBMGミュージック・エンタテインメントも条件付でDRMを削除した。こうして4大レコード会社がDRMなしの音楽配信に向かい、中小のレコード会社もこの方向に進んでいる。したがって、ここで取りあげたスティーブ・ジョブズ氏の主張は、今や実現しつつある。

なお、上記のように、アップルは当初DRMなしの曲の価格を標準より高く設定していたが、2007年10月に標準価格に戻した。

参考文献

- 1) Steve Jobs, “Thoughts on Music”, Apple, February 6, 2007
(<http://www.apple.com/hotnews/thoughtsonmusic/>)
- 2) “EMI Music launches DRM-free Superior sound quality downloads across its entire digital repertoire”, EMI Press Release, 2 April, 2007
(<http://www.emigroup.com/Press/2007/press18.htm>)
- 3) “EMI, Apple partner on DRM-free premium music”, CNET News, April 2, 2007
(http://news.cnet.com/2100-1027_3-6172398.html)